

---

## 2 度目の人生

you

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2 度目の人生

### 【Nコード】

N 4 0 3 0 Z

### 【作者名】

y o u

### 【あらすじ】

猫を庇って死んだ主人公が転生先で色々するはなしです。

まじっすか！

どこだよここ・・・

目を開けると真っ白い空間にいた。

『お！目が覚めたか。』

そして俺の目の前にはよぼよぼな爺さんがいた。

なんで爺さんなんだよ・・・はあ、こういう時は綺麗なお姉さんとか少女とかじゃねえの？

『悪かったなよぼよぼな爺さんで』

あれ？声にだしてたっけ

『まあ、わしは神だから心を読むことぐらい簡単じゃ』  
まじっすか！

「んで、何で俺はここにいるんだ？」

「それはお前が死んでしまったからじゃ」

え？

「嘘だ！」

『本当じゃ・・・お前はトラックにひかれそうな猫をたすけて死んだのだ・・・』

はあ、まあいいんだけどさ・・・まだやりたいこと1個だけあったな・・・

『やりたい事とは？』

「プリンに醤油かけて食ってみたかった・・・」

『・・・別にプリンに醤油かけたってプリンと醤油の味しかないぞ』

え？まじで？ならいいや。

「つーか何で俺はこんなとこにいるんだ？」

「そうじゃった・・・お前が助けた猫はわしのペットでな、たすけてくれたお詫びとして転生してもらおうとおもってだな。」

「転生するのはいいがどういう世界なんだ？」

「魔法のある世界じゃ」

「よっしゃあああああ！」

「めっちゃ面白そうやん！」

「んで、転生する前に3つぐらい願いを叶えてやろうと思ってだな・・・ねがいなんだ？」

「願いか・・・」

「1つ目は身体能力をかなりあげてくれ」

「2つ目は魔力無限」

「3つ目は・・・あっちの世界に剣ってあるのか？」

「もちろんあるぞ」

「じゃあ3つ目は俺が刀になれと思ったたら刀になれる木刀で・・・あ、絶対に折れないようにしてくれ。」

「わかった・・・では転生させるぞ」

「なんか・・・急に・・・ねむ・・・く・・・なつて・・・き・・・た。」

## 入学式（前書き）

生暖かい目でみてください

## 入学式

いやあ、無事に転生できたのは良かったんだけどさ・・・  
赤ん坊からってどうなのよ・・・ちなみに今は1歳ね。

「アルスゝオムツ取り替えましょうね」

2時間に1回オムツの取替にくるって・・・

「ああああああ（やめて、俺のライフはもう0だ！）」

「これでよし！」

もうお嬢にいけない・・・言い忘れてたけど俺の名前はアルスⅡグ  
ランドっていうんだ

そっぴや俺の絶対に折れない刀ってどこにあるんだろ・・・まあ今  
度でも探せばいいか。

はあ時間ってこんなに経つのがおそいんだな・・・

そして14年の月日がたった

「アルスおきなさゝい！今日は入学式でしょ。」

「へい」

今日は有名なオアーズ魔法学園の入学式だ！

あ、ちゃんと受験はしたぜ・・・ぎりぎり合格だったんだ・・・あ  
と1点でも足りなかったら落ちていた。

「早く朝ごはん食べていきなさい、遅刻するわよ。」  
うお、もうこんな時間か早く行かないと。

「いつてきまゝす」

そうそう、この14年の間に何を学んだかというとな、この世界の事と文字、魔法、  
能力のことだ

この世界のことは・・・魔物がいる！詳しくはめんどくさいので今度話す。

文字覚えるのは大変だったわ・・・地球の文字を知ってるからそれに慣れてしまつて何回もまちがえたわ・・・覚えるのに10年かかったわ・・・

魔法には火、水、風、土、雷、聖、闇という属性があり、1人2つぐらい属性があるらしんだ・・・たまに3つ使いこなせる人もいるみたいだがな。聖と闇は特別みたいだ・・・くわしいことはわからない。

それと刀はまだ見つかっていない。どこにあんだよ！

スキルのことはだな、人一人には生まれつき能力が2つあってだな・・・1歳にはその能力のことについてわかるらしんだが・・・俺の能力はまだわからない。なぜ？

そんなこんなで30分後

よし、ついた。ここがオアーズ魔法学園か・・・まあ、来るのは2度目だけだね！

ん？校門に新入生は体育館にお集まりくださいってという紙が貼つてある。

というわけで体育館につきました  
校長先生の話がはじまった

30分後

長いっ！

まあ、校長先生の話ってどの学校もながいよな・・・はあ、なんか  
イライラしてきた・・・

さらに30分後

こんなに長く話してもまともにきいてるやつなんているわけねえだ  
ろ！生徒のこと考えろよハゲが！

-----

1時間後

「これで校長先生のお話を終わります。」  
やっと終わった・・・長い戦いだった。（睡魔との戦い）

今俺は自分のクラスに向かっている。

この学園には、AとEの5クラスあって入試の点数が高い人順にA  
とEに入るそうだ・・・ちなみに俺は最下位だからEクラスだ・・・  
実技さえあれば・・・

クラスに入って自分の席に座り（窓際の一番後ろ）ぼーっとしてい  
ると、いろんなところから校長の悪口が聞こえる「あのハゲが」とか  
「話し長すぎだろあの短足」とか「死ねくそじじい」とか「馬みた  
いな顔しやがってとか」とか「胴長が！」とか・・・まあ、あんだ  
け長く話してれば嫌われるだろうな。

ガラッ

「席につけー」

女の先生が入ってきた・・・先生ちつちえーな・・・バゴツ！・・・頭をファイルで殴ってきたしかも角で・・・何で？

「今、先生ちつちや！って思ったでしょ？」

「イイエ、ソナコトハアリマセン」

「そう？」

いてえ、なんで思ったことがバレるんだよ・・・顔にでてたか？・・・クラスのみんながドンマイって感じで俺を見てくる・・・

「私はミカニスイツといいます。趣味は読書で、好きなモノは牛乳です」

牛乳か・・・ミカ先生がこっちを睨んできた・・・こええええ

「じゃあ一番右前の席の人から自己紹介してください」

・・・

・・・やつと俺の番だ。

「俺の名前はアルスニグランド、趣味や好きなモノは特にありません」

「全員自己紹介終わりましたし、今日はここで終わりです。明日からはちゃんと授業に入ります忘れ物はないようにしてくださいね。それではさようなら」

やつと終わったよ・・・てゆーか、まだ頭が痛いんですけど・・・どんだけ強く殴ったんだよ。

あ、ちなみに俺の帰るところは学生寮だ。家からだとなん分かかかるからな。

さてと、寮に行くとするかな。

「おお！」

自分の部屋についた俺は思わず大きな声をだしてしまった・・・結構広いやん・・・俺の部屋より広いぞ！

しかも、一人部屋だぞ！最高だ！・・・と感激していたらいつの間

にか23時58分になっていた・・・時間が経つの速いな。  
よし、目覚ましもセットしたし、寝るか

## 入学式（後書き）

アドバイスをください

## 魔力検査（前書き）

駄文

## 魔力検査

「ん・・・朝か・・・」

7時半か・・・学校始まるのは8時半だし・・・2度寝するか・・・

「はやくついてこいや!」

「イヤ!」

廊下からめっちゃでかい男の声が聞こえる・・・うるせえ・・・どっかに耳栓があつたはず・・・

あつたあつた・・・これでよし

「はやくこいつつてんだろ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「たすけてー!!!!!!」

イライラしてきた・・・

「でけえ声だすな!!」

バンッ

「うるせえーーーー!!」

俺はドアを蹴り開け男に向かって叫んだ。

「耳栓してんのにうるせえって言うことよ!二度寝できねえじゃねえか!」

・・・どうやら女を自分の部屋に連れていこうとしていたみたいだな。

「どうみてもお前が悪いようにしか見えないので・・・」  
ドガッ

「ぐえ・・・」

うゝん・・・弱い・・・

「あ、ありがとうございます」

これは・・・部屋に連れ込もうとするのもわかる。

「どういたしまして・・・俺はアルス・・・お前は？」

「私はアルスⅡミザールといいます」

「よろしく！」

「よろしく／＼／」

アルス・・・アルス・・・あ！

「お前、一番最初に自己紹介した？」

「はい！あなたは最後に自己紹介をした人ですよね？」

おお！・・・覚えていてくれたか！

こんな可愛い子に覚えてもらえるなんて感激だ！

ちなみにアルスの容姿はアマ ミの 咲に似ている。

「もうそろそろ時間ですし、いっしょに学校行きませんか？」

「よろこんで！」

-----

5分後

俺は自分の席で授業始まるまで寝ること・・・

ガラッ

「欠席はいませんねー・・・いまから皆さんの魔力量を測りに行きますので体育館に来てください」

寝れなかった・・・

ドンッ

誰かがぶつかってきた。

「お！スマン！」

「こちらこそ・・・」

「お前って最後に自己紹介した「あの」アルス？」  
ん？あの？

「そうだが・・・」「あの」？」

「ああ！自己紹介で唯一つまんねえ自己紹介した「あの」アルス！」  
つまなくて悪かったな・・・

「それでもって・・・女子からかなりモテる「あの」アルス！」  
はあ、自己紹介に面白さ求めてどうすんだよ・・・

「え？ああそうなんだ・・・」

聞いてなかった・・・

「俺はアレックス」メラクよろしく！自己紹介で話したと思うが趣味は美人探した！」

まじか・・・

「・・・よろしく」

「早く体育館いこうぜ！」

「おお・・・」

体育館

「全員揃いましたねー・・・では出席番号順に魔力を測ってください。

ちなみに自分がどの属性かもわかりますよ。ちなみにランク付けしますからね」

俺は出席番号は2番だ。一番はアリスだ。3番はアレックスだ

「このボールに触ってください。このガラスのボールはその人の属性に反応して色を変えます。

火だったら赤

水だったら青

風だったら緑

土だったら茶

雷だったら黄

聖だったら白

闇だったら黒となります」

アリスがボールに触れた・・・ボールが赤と青に変化した。  
てことは火と水の属性か。ランクはB

次は俺だな・・・俺はボールに触れた。

ボールがいろんな色に変化した・・・そして

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアン

みんながありえないって目で見てくる。

そりゃそうだ・・・俺、魔力無限だし・・・

「ええと・・・Aランクです・・・」

「次、アレックス君」

「お前すげえな！全部の色に変化したし・・・しかもボールを壊す  
なんてすげえ！」

「せんきゅ！」

そして魔力測定が終わった。

ちなみにアレックスの属性は風と土だ・・・ランクはD

「次の時間は・・・身体能力とスキル、どんな攻撃魔法が得意か見  
ますのでグラウンドに集まってください」

身体能力と自分の能力か・・・

身体能力は別にいいとして・・・はあ、スキルか・・・まだ1個も  
見つかってないのに・・・

俺はグラウンドに向かう途中いろんな人に「何でそんなに魔力が高  
いんだ！」とか「何で全属性がつかえるの？」とか・・・いろいろ  
聞かれてしまい授業に遅刻してしまった。

## 魔力検査（後書き）

編集しました。

## 身体能力測定

「全員そろいましたねー・・・これから身体能力測定をします。」  
身体能力か・・・どんぐらいあがつてんだろっ。

「もうすこしで担当の先生が来ますので・・・」

「あ、あれが担当の先生・・・か？」

アレックスの顔が一瞬にして青くなった。

俺も担当の先生をみると・・・やべえ吐きそうだ。

「俺が身体能力測定担当のジョニー＝レックスだ！」

ムキムキな上にＴシャツ１枚だ。しかも顔・・・

「これから俺と戦ってもらう！勿論武器や、魔法の使用はなしだ！俺がクジを引くから呼ばれたら前に来て

それ以外のやつは少し離れてるように！・・・ランクはもちろんつけるぞ！」

え・・・戦うの？・・・あんなやつと？

アリスの方を見ると涙目になって俺の袖を掴んできた。

「では、最初はアリス＝ミザール」

「・・・頑張れ」俺

「・・・生きて帰ってこいよ」アレックス

「・・・うん」

「初め！」

アリスが先生に向かって走りだし殴りかかった。

それを先生は避けて足払いをしようとしたが、アリスがジャンプして躲し・・・

「・・・結構飛んでるな」アレックス

「すごいジャンプ力だ・・・」俺

アリスはすごいスピードで落ちきたしかも連続でパンチをしながら

「おお！手が16個も見える！」

「すげえ……俺もできると思うけど……まあ、先生はそれを躲したが……」

「アリスってあんなに強かったんだ」

「アリスはこの学園に入って大会にでるため修行してきたからなえ？」

「お前とアリスって知り合いだったのか？」

「ああ、幼馴染だ！」

「そうだったのか……」

「つーか、大会ってなんだ？」

「知らないのか？……クラス対抗オアーズ武闘大会ってのがあっただな

1年生でトーナメント形式で戦っていつて優勝したら2年生の大会にでて

さらに優勝したら3年生の大会に出れる。しかも一般の客も見に来るらしいぜ」

「うわっ、めんどくさっ！」

「でも、優勝賞品はすげえぞ！1年の優勝賞品はかなり豪華な寮の部屋（大会に出場した人にだけ）で、

2年の大会では一人200万、3年では500万だつてさなんだつて」

「まじか！ぜったい優勝するぞ！」

「ちなみに出場者人数5人までだ。出場条件は身体能力測定かスキル測定、魔法測定」

「……もうすぐでアリスの戦いが終わるぞ」アレックス

「しまった！話に夢中で見てなかった！」俺

アリスが先生に向かって回し蹴りを放ったが足を掴まれて地面にたたきつけられた。

うわぁ・・・痛そうだな・・・

「終了だ！・・・ランクはCだ！」

「お疲れ様」

「Cランクなんてすごいじゃないか！僕は絶対DかEだよ！」  
暗い顔で戻ってきた

「まけちゃった・・・」

アリスが深いため息を付いた。・・・そりゃあそうだろうな  
修行してたらしいし。

「まあ、先生が相手だったしね」

「次！アレックス!!メラク！」

「うげえ、俺かよ・・・」

「まあ、遅かれ早かれ来ることだし・・・頑張れよ！」

「頑張つてね！」

「はぁ・・・いつてきまゝす」

「初め！」

アレックスが先生に向かって走りだし・・・た・・・すげえ速い  
先生に向かって連続でパンチは放つ・・・先生はそれを  
片手で受け止めている。

「すごい速さだな・・・しかもあのパンチ・・・」

あのパンチはこのクラスでも数人にしか見えていないと思うぞ

「アレックス君は武闘大会に出るためにずっと50キロの重りを

両手両足につけて修行してたんだよ・・・そのパンチを片手で受け止めるなんて・・・」

「先生つてどれだけ強いんだよ・・・」

「はっ！」

先生が足払いをしたがアレックスはそれをジャンプして躲し空中で一回転し、アレックスがかかと落としをした・・・先生足払い好きだな・・・

「おらあ！」

ドゴオオオオオオオ・・・砂煙でアレックスと先生が見えない

砂煙が晴れてきた・・・クレーターができている・・・まじか！先生はだいじょうぶなのかよ・・・

アレックス side

「すごい力だな！これは俺よりもすごいんじゃないか！」

手をクロスしてガードしやがったのか・・・一応僕の本気なんだけどな・・・そんなことより！

「まだまだいきますよ先生！」

「いや・・・試合終了だ！」

「え？なんで？」

これからがいいところなのに・・・

「これは身体能力測定だ！俺を倒すことが目的ではない！それとお前のランクはAだ！」

「よっしゃ〜！」

アルス side

「ただいま」

アレックスが笑顔で帰ってきた

「おつかれ」

「アレックス君すごいね！」

「まさか本気のかかと落としをガードされるとは思わなかったよ  
それに骨にひびすらはいっていないとは・・・次からは重りを10  
0キロにするかな！」

「次！デリラ＝フルド」

「はい！」

「おお！あの子可愛い！ツインテールだ！」

そっぴいこの趣味って美人探しだったな・・・

「初め！」

デリラが開始の合図と同時に分身した・・・しかも8体

「分身？」

「ものすごい速さで動いてるんだろうな・・・アレックスも  
もうちょい速くなればできるようになると思うぞ」

「おお！まじか！じゃあ帰ったら早速100キロにして修行するかな！」

8体のデリラが先生に向かって右ストレートを放つ・・・当たった！  
8体のデリラがアップパーを決めようとしたが先生に手を掴まれた  
「な！」

デリラが驚いているようだ・・・

「終了だ！文句なしのAランクだ！」

「あいつすげえな・・・」 俺  
「強くて可愛いか・・・最高だ！」 バカ  
「試合開始1分で終わったって・・・」 アリス  
「まあ、先生に一発当てたしな・・・」 俺  
「私は全部躲された・・・」 アリス  
「でも僕は黒髪ロング派だな」 バカ  
「おい、バカ・・・アレックス、トイレ行こうぜ」  
「いまバカっていったろ」  
「いつてねえよ・・・早く行こうぜ」  
「・・・おう」

――――  
「次！アルスⅡグラウンド！お前は最後だからどちらかがダウンするまでやるからな！」

俺は最後だった・・・ちなみにクリスⅡアルタイルってやつ以外全員瞬殺だったらしい・・・  
らしい・・・っていうのは俺らがトイレに行ってる間に全員終わったから見ていないのだ・・・。  
つか、まじかよ！どちらかがダウンするまでって・・・めんどくさ

「はあ・・・いつてきまゝす」

自分の身体能力は50%の力を出すとただのパンチでクレーターが出来るレベルで  
走ったらよほど強い人じゃないと俺は見えないレベルらしい・・・  
なぜわかったかというと  
トイレに行ってる途中神の声が聞こえて説明してもらった。ちなみ

にもう神は俺に話しかけなく

なるらしい・・・別にどうでもいいけどね！爺なんか話したくないし！

「ドンマイ！」

「頑張つてね！」

「初め！」

20%ぐらいの力で行くか

俺は先生に向けて飛び膝蹴りを放った。

「な！」

先生はそれを慌てて躲した

まあ・・・かなり速いしね

俺はすぐに先生の懷に潜り込んで連続でパンチをくらわせた。

「がはっ・・・」

先生はすぐに回復したらしく俺に殴りかかってきた。結構速いな・・・

俺はバックステップで避けたが・・・先生がすごい速さで俺に蹴りかかってきた

「はやっ！」

「はっ！」

スカッ・・・

アレックス side

アルスってあんなにつよかったのか・・・しかもあの速さ・・・目で追うのがやつとだ。

「はやっ！」

「はっ！」

先生もかなりの速さでアルスに蹴りかかった・・・さすがにあれはアルスでもかわせないだろ・・・



ああ、倒したからみんなあんな声をだしたのか

「ありがとっ！あれって？」

「先生が最後に放った蹴りをすり抜けたろ！」

「あれは残像だよ・・・高速で動いただけだ」

「動いただけだって・・・」

「デリラってやつは残像ってわかったみたいだね・・・みんなより早く気づいて俺が「上だ」って叫ぶ前から上をみたし

・・・」

「そうか・・・」

「アルス！俺に修行つけてくれ！お願いだ！」

「アルス君！私もお願い！」

修行か・・・放課後ならすることもないし・・・よし！

「放課後でいいならいいよ！」

「「ありがとう！！」」

「アルスさん！私もみてもらっていいかな？」

ん？デリラが俺に頭を下げて頼んできた・・・別にさげなくていいのに

「多分俺の修行はつらいよ・・・それでもやる？」

「やる！」

「ならいいよ！」

「やった〜！」

すごい喜んで・・・修行はじめたら後悔するだろうな・・・

「・・・私にもお願い」

次はクリスカ・・・まあ、いいか

「いいよ！」

「・・・ありがとう」



## 身体能力測定（後書き）

戦闘描写・・・アドバイスください・・・  
そしてだれかい能力を考えてくれ・・・  
「解析【アナリシス】」みたいな感じで

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4030z/>

---

2度目の人生

2011年12月16日22時54分発行